

第1期(令和2年度～令和6年度)

志津川高校魅力化構想 中間骨子

1 志津川高校が南三陸町に与える影響

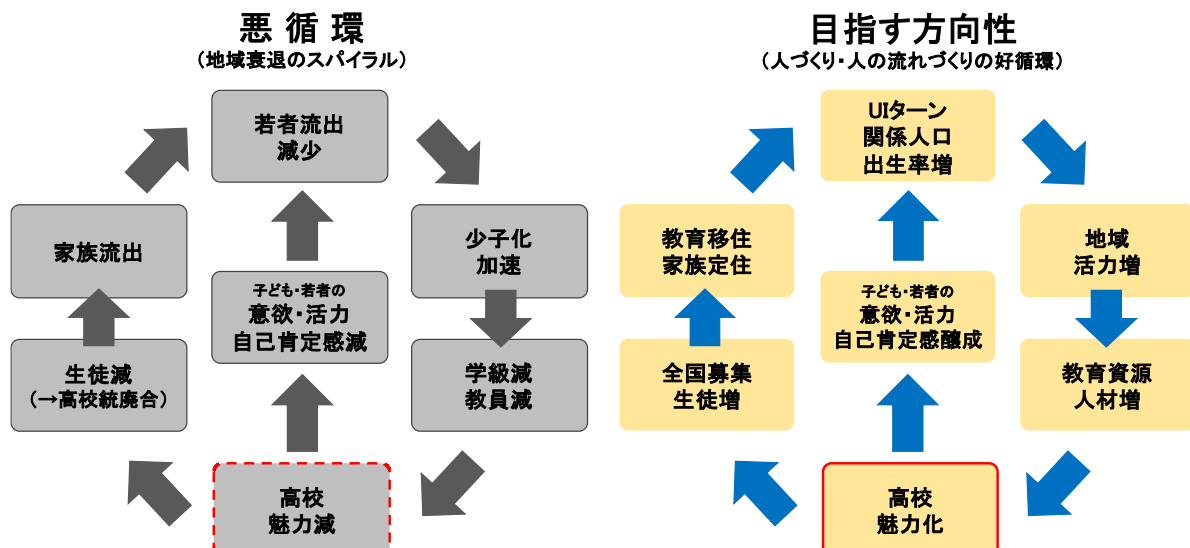
志津川高校は、「真・和・敬」の校訓を基本理念とし、地域に根ざした特色ある教育活動が行われています。創立95周年を迎え、これまで約12,500名の同窓生が各方面で活躍しています。平成15年度からは、県内唯一の地域連携型中高一貫教育校として、南三陸町の未来を担う人材の育成に取り組んでいます。さらに、平成22年度から情報ビジネス科で取り組んでいる「南三陸町モアイ化計画」では、生徒が町のシンボルであるモアイの缶バッジ、ストラップ等を製作・販売し、震災で失った町民バスの購入資金として寄付をいただきました。この寄付により、念願の町民バスが復活し、日本フィランソロピスト協会より奨励賞を受賞しています。

その一方で、平成22年度には413人だった生徒数が、本年度は199人に半減し、1学年120人の定員割れが常態化しています。南三陸町の地域活動・人材育成に大きな貢献を果たしてきた志津川高校がなくなれば、中学卒業とともに南三陸町を離れ、全ての生徒が町外の高校で学び、日中はこの町に15歳から18歳の生徒がいなくなります。遠方に通学させなければならないため、生徒・保護者の時間的・経済的な負担が増えます。それにより、生徒とともに世帯ごと転出していく家庭も増加することが予想されます。すべての子どもが高校・大学を町外で過ごすため地元へ愛着が持たず、大学卒業後も地元に戻らない可能性が高くなります。さらに、教育費の負担増により、子どもを生むことへの不安が高まるため、出生率も低下する可能性があります。

また、現在の人口予測では、南三陸町の人口は1975年の約22,300人をピークに数々の人口減少対策の甲斐もなく一貫して減少が続いています。2010年には高齢人口の増加が全国に先駆けてピークアウトし、さらに若年人口が加速度的に減少の一途をたどる予測となっています。

このように高校進学を含む若者の流出が南三陸町の未来へもたらす悪影響は大きく、現状のまま進むと「若者の流出→既存産業の衰退→雇用の縮小→地域活力低下→若者流出」という悪循環を加速させることとなります。子どもの健全な発達、ふるさと教育、保護者の経済的負担、少子化、UIターンの定住、文化の継承、地域の活性など、様々な観点において、志津川高校の存続は南三陸町の未来と直結しています。

図1 目指す方向性(人づくり・人の流れづくりの好循環)



2 現状の環境要因

協議会で実施したアンケート調査結果を参考に、南三陸町と志津川高校の置かれている現状を再認識するために内部要因である強み(Strengths)、弱み(Weaknesses)、外部要因である機会(Opportunities)、脅威(Threats)という四点で分析する SWOT 分析を行いました。

図2 志津川高校と南三陸町の現状【事業環境分析】

	プラスの要素	マイナスの要素
内部要因	<個に起因する要因> ・生徒が素直である ・学校のルールを遵守することができる生徒が多い <町・高校に起因する要因> ・個別指導や少人数指導ができる ・部活動加入率が高い ・モアイ化計画等の地域に密着した活動がしやすい ・生徒と教員で良い人間関係がつくれている ・台湾との国際交流ができています ・公営塾がある Strengths 強み S	<個に起因する要因> ・学習意欲が低い生徒が増えている ・家庭学習時間が少ない ・進路意識が弱く、自己の未来をイメージできない生徒がいる <町・高校に起因する要因> ・情報発信が不足している ・中学まで続けてきた部活動を続けられない(今後) W 弱み Weaknesses
外部要因	Opportunities 機会 O ・活用しやすい豊富な地域資源がある ・協力的な町内企業・事業者の存在がある ・震災後の移住者の増加している ・協力的な卒業生(社会人・大学生)の存在 ・地域課題が豊富であり、地域課題研究の絶好の教材がある ・AIなどの情報革新	T 脅威 Threats ・南三陸町の人口減少・少子高齢化が進んでいる ・町内中学生・保護者からの「学力」に対する評価の低さ ・町内での学習環境の少なさ ・多様化による選択肢の増加 ・グローバル化の発展 ・企業が求める社会人としての職業能力の変化 ・ライフスタイル・働き方の価値観の変化

以上の分析を踏まえ、本町の中・高校生を取り巻く環境について、課題と可能性を以下のとおり整理しました。

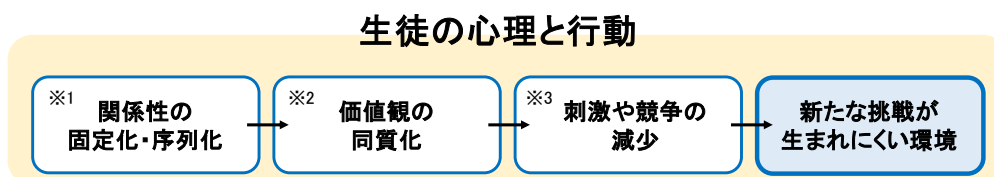
(1) 志津川高校におけるマイナス要因とプラス要因

① 少人数による教育のマイナス要因

南三陸町では、生まれも育ちも似たような幼少期からほぼ変わらない狭い人間関係が高校卒業時まで続きます。それは、地域とのつながりを生み、安心で安定した地域環境の中で生活できる一方で、生徒たちの関係性は**固定化・序列化(※1)**しやすく、「この子はこういう性格」「私はこの役割」と新しい個性が発揮されにくい傾向があります。また、多感で価値観の広がりを見せる中学・高校時代に、生徒数が少なく、クラス替えが少ない環境下では、新たな価値観との出会いや新しい人間関係の構築もできず、**価値観が同質化(※2)**しやすい傾向にあります。新しい価値観を寛容に受け入れ、認め合い、尊重しあう環境や機会が乏しいこともあげられます。

そして、集団の中で切磋琢磨する経験が少なく、**刺激や競争もあまりない(※3)**ため、挑戦・成長しようという意欲が生まれにくい状況にあります。

図3 生徒の心理と行動



② 少人数による教育のプラス要因

規模が小さいということは、一人ひとりを大事にする少人数指導ができるという強みとも言えます。実際、小規模高校になるほど1人の教員に対する生徒数は少なくなっています。その一方で、個別指導においては圧倒的な強みを持っていると言えます。全教員が全生徒の顔と名前や性格まで把握し個別に対応できる強みを活かし、一人ひとりの多様な個性、能力を伸ばすことができます。これらの強みを活かし、志津川高校では「少量・多品種・高付加価値」の人づくりを目指すべきものと考えます。

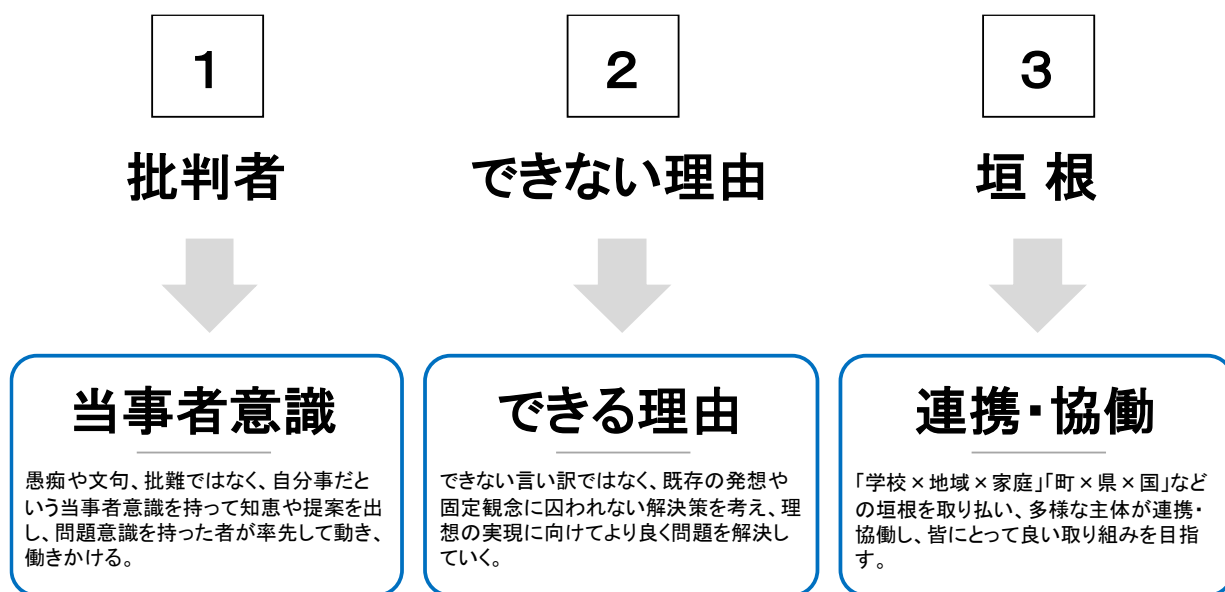
③ 豊かな地域資源と多くの課題を教材として活用

南三陸町には教育に活用しやすい地域資源が豊富にあります。逆に高校の施設・設備はあまり充実しておらず、教職員数も多くはありません。その一方で、志津川高校は住民の「おらほの学校」という意識や、存続に対しての危機感も強いものがあります。そのため高校側が門戸を開いて協力を仰げば、手を貸してくれる地域の土壌ができています。また、小中学校でのふるさと教育の土台もあるため学校教育に関わることに慣れている地域住民も多い。さらに地域における社会関係資本が高く治安も良いため、都市部よりも安心して外部者を学校内に入れることができ、生徒を地域に出すことができる。その上、地域に伝わる多くの伝統や文化からは、自然との共生の知恵や勤勉性など、日本人としてのアイデンティティとなり、更にこれからのグローバル社会で独自の価値を発揮する重要な価値観を体感的に学ぶことができます。

また、日本は世界の中の「課題先進国」という言い方がありますが、その中でも南三陸町は「課題最先端地域」です。南三陸町には少子高齢化・人口減少・財政難などの日本の重要課題と、それに伴い今後日本が直面する多くの具体的な問題が山積しています。しかも、社会の縮図と言われるように、それらの問題が生活圏内にとっても身近に転がっています。さらに、南三陸町には「ないもの」がたくさんあります。ゲームセンター、ショッピングモール、アミューズメントパークなど、早く簡単に楽しませてくれる快適で便利なものはありません。そうした不便な環境だからこそ、限られた資源をうまく活かして豊かに生きていく知恵が身につくやすいと考えています。このような特徴がある南三陸町は、課題解決型学習や探究学習を展開し、生き抜く力を育むには絶好の生きた教材であると考えています。こうした恵まれた学習環境を活用しない手はなく、生徒を学校内に留め、すべてを教員がやろうとせず、「地域全体を学校」という発想に転換することが肝要であろうと考えます。

3 志津川高校魅力化の行動規範

学校の魅力化を進める上で、まずこれに携わる教職員や関係者たちが魅力的である必要があります。そのため、魅力的な大人として、まず生徒たちに求めることを自分たちが手本として実践する必要があります。そのために以下の項目を志津川高校魅力化の実行にあたっての規範とします。



4 育てたい人材像の策定

「若者流出→既存産業の衰退→雇用の縮小→地域活力低下→若者流出」という悪循環を断ち切り、「若者定住→起業家育成→産業・雇用創出→地域活力向上→若者定住」という好循環に変えていく必要があります。

志津川高校の約80%の生徒は卒業後に進学や就職で町外に出ていき、その中で将来町へ戻ってくる割合(Uターン率)は約27%(平成9年度卒業生調べ)程度です。実際、現在の30~40代の残人口率(出生数に対して、現在住んでいる人数の割合)は約40%。今後の南三陸町の自立存続を考えると、このUターン率を上げていくことが地域を持続可能にしていくための重要課題であります。若者に地元へ帰らない(帰れない)理由を尋ねると、多くが「町には仕事がない」「働く場所がない」と答えます。この南三陸町の人づくりが目指すべきは、「田舎には何も無い」「都会が良い」という偏った価値観ではなく、地域への誇りと愛着を育むこと。そして、「田舎には仕事がないから帰れない」という従来の意識から、「自分のまちを元気にする新しい仕事をつくりたい」といった地域起業家精神を持った若者の育成であると考えました。そのことを踏まえ、南三陸町唯一の高等学校である志津川高校の存在意義は、地域の最高学府として、地域の医療や福祉、教育、文化の担い手とともに、地域でコトを起こし、地域に新たな生業や事業、産業を創り出していける「地域起業家的精神をもった人材の育成」と定義しました。

但し、高校卒業時に町へ残るよう無理に押し留めるようなことや、「なるべく遠くに行って欲しくない」と近場に抑えようとするのは、生徒たちの可能性の開花を阻害することになる、行ってはならないと考えます。町から出る生徒には、「手の届く範囲に」などと小さいことを言わず、海外も含めて最前線へ思い切り送り出してあげるべきだと考えています。

高校卒業時までには地域起業家精神が育まれていけば、この町が好きで、ここでやりたいと自らの意志で地域に戻ってくる若者は増えていくのではないのでしょうか。地元との繋がりを持ちながらも、20代は外の激しい荒波の中でしっかり鍛えられ、自分で仕事を回せるだけの力をつけ、たくましい姿になって戻ってくる。まさに、サケが春に清流から大海へ旅立ち、数年後、また大きくなって還ってくるイメージです。このように意欲や能力の高い若者たちが還ってくることで、地域は活性化し、また教育に再投資できるといった中長期的な循環を生むことができます。理想は、この南三陸町で必要な人材を志津川高校が輩出し、人の自給自足ができる持続可能な状態です。また、たとえ地域に戻ってこなくても、町への愛着や感謝の心が養われていれば、南三陸町を外からPRしたり、店を持ったなら地元のものを使ったり、ふるさと納税をしたり、知恵や人脈を提供するなど、どこからでも地域貢献はできます。そして、この町で身につけた地域起業家精神や地域のつくり手としての力は、将来どこへ行っても、どんな分野でも活躍できる人材に成長していく力になると考えています。

● 地域の課題(悪循環)

既存産業衰退、若者流出、後継者不足、公共依存
(少子高齢化、文化行事の衰退、財政難)

● 地域の向かう指針

産業創出、若者定住促進、継承者育成、自助共助

● 求められている人材

地域で生業・事業・産業を創り出せる人材
(地域起業家精神)

人の自給持続

「仕事がないから帰れない」⇒「仕事をつくりに帰りたい」

図4 高校時代に育てたい力



5 ビジョン実現に向けた具体的な取り組み

1 校名・学科・コース編成について

(1) 校名

設立100周年となる令和6年度に校名を「志津川高等学校」から「南三陸高等学校」に変更。

(2) 学科・定員数

- ① 学科については、現行の普通科・情報ビジネス科の2学科を踏襲し、普通科については2コースを新設、情報ビジネス科はコース編成を行わず、特色のある教育活動を展開していく。
- ② 定員数については、普通科2学級(80名)、情報ビジネス科1学級(40名)の現行維持を目指す。
- ③ 全国募集については、令和4年度から実施することを目指し、寮等の環境整備については継続して検討を進めていく。また、県外生徒の募集定員等については、宮城県教育委員会とも協議し、適正な募集定員を決定する。

○現行の学科・類型編成

普通科 2学級(80名)	教養系 文理系
情報ビジネス科 1学級(40名)	情報システム系 会計ビジネス系

●新たな学科・コース編成(案)

普通科 2学級(80名)	地域創造コース 特別進学コース
情報ビジネス科 1学級(40名)	コース編成なし

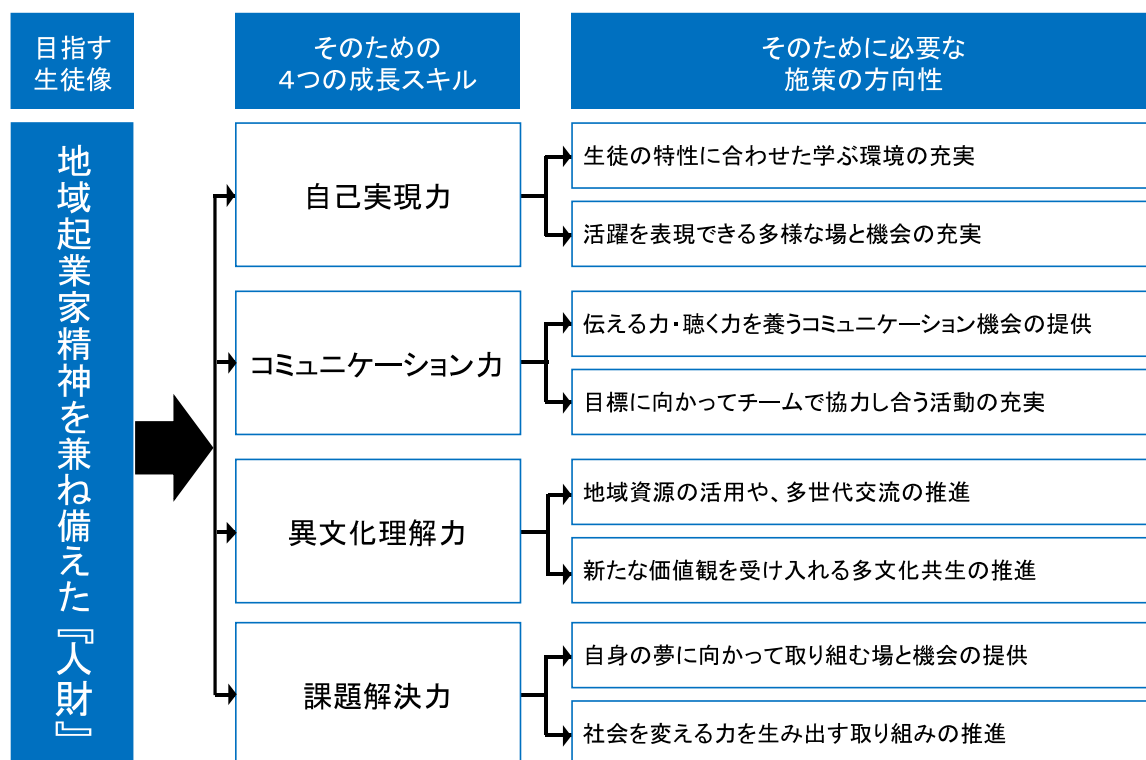
(3) 各学科・コースの概要

コース名称	普通科 地域創造コース
コース概要	<p>地域創造コースの中核に位置するのが、1年次に週3時間行う「地域学(仮称)」と2年次に週2時間行う「地域探求学」という学校設定科目。これらの授業は南三陸町そのものを教材にした学校設定科目で、生徒それぞれの興味に応じてプロジェクトチームを組み、地域内外の優れた人材の協力を得ながら地域の魅力や課題を探究し、その解決策を立案し、実際に地域で実践し、評価・検証・改善を行っていく授業である。その過程を通してコミュニケーション能力や課題発見解決力などを身につけるとともに、自分自身と地域や社会のつながりを学んでいく。</p> <p>また、これらの授業と平行して行う「生活ビジネス(仮称)」という科目では、チームワークやPDCAサイクル、目標設定、計画立案、プロジェクトや話し合いの進め方、振り返り方法などを参加体験型授業で学び、地域学や部活動、学校生活で実際に活用しながら身につけていく構造を目指す。</p>
目指す進路先	(進学)AO入試等を活用した私立大学、短期大学 / (就職)公務員、民間企業

コース名称	普通科 特別進学コース
コース概要	<p>今までは、「志津川高校に進学すると、学力が伸びず大学進学に不利」という“認識”が根深くあり、大学進学を希望する子どもの多くは、中学卒業時に町外の高校へ進学していく傾向にある。こうした状況を打破し、志津川高校であっても学力が伸び、町外に出なくても、国公立大学や難関私立大学などへの進学希望を実現できる教育環境づくりを進める必要がある。そこで、今まで弱みだと見られてきた「小規模」ということを、一人ひとりに手厚い指導が可能な少人数教育という強みと捉え、個別指導や少人数指導で国公立大学や難関私立大学への進学を目指す「特別進学コース」を開設する。</p> <p>さらに、今以上に公営塾「志翔学舎」と連携を図り、自立学習や個別指導、少人数授業に加え、ICTを効果的に活用し、生徒の学力向上をサポートする。</p>
目指す進路先	(進学)国公立大学、難関私立大学

コース名称	情報ビジネス科
コース概要	<p>情報ビジネス科であることを意識して、情報教育とビジネス教育を先進的に融合させることも目指す。そのために、これからの新産業創造を担い、起業の精神にあふれ、高度な専門性を備えた国内外で活躍する人材の育成を行う。さらに、県内外の大学や産業界と連携して、探究型学習を通して「考える力」を育むことにより、大学でのより高度な学問研究につなげる。高大7年間を見据えた教育を行う、新しいタイプの学科づくりを目指す。連携大学の協力による語学研修など、国際理解教育の充実も図る。「英語」「情報」「会計」等の各分野のライセンスをいくつか取得することにより、連携大学の特別枠や推薦入試での入学に繋げる。</p>
目指す進路先	(進学)AO入試、連携枠等を活用した四年生大学 / (就職)公務員、民間企業

2 実行プラン体系図



そのために必要な施策の方向性	そのために必要な取り組み
1 生徒の特性に合わせた学ぶ環境の充実	1-1 学ぶ意欲と確かな学力を育む、キャリア教育や少人数指導の充実 1-2 校外での学びの機会の提供(公営塾)
2 活躍を表現できる多様な場と機会の充実	2-1 小中学校と連携した学習の推進 2-2 部活動などの対外活動の支援や外部指導者の強化
3 伝える力・聴く力を養うコミュニケーション機会の提供	3-1 コミュニケーション能力の向上のための実践型教育の推進
4 目標に向かってチームで協力し合う活動の充実	4-1 生徒会、部活動などを通じた生徒主体の教育活動の推進 4-2 地域課題研究などプロジェクト型学習の推進
5 地域資源の活用や、多世代交流の推進	5-1 専門学校、大学と連携した地域資源活用事業の推進 5-2 高校生の活動をサポートする人財ネットワークの構築
6 新たな価値観を受け入れる多文化共生の推進	6-1 海外からの留学生の受け入れ、交流、派遣の推進 6-2 寮等の受け入れ体制の充実
7 自身の夢に向かって取り組む場と機会の提供	7-1 生徒が主体的にマイプロジェクトを実行する「マイプロ」の推進
8 社会を変える力を生み出す取り組みの推進	8-1 生徒が主体となる学校運営の推進
↓ 8つの施策を推進するための支援体制	
9 持続可能な高校魅力化の推進	9-1 生徒募集と支援体制 9-2 寮の整備等の受け入れ体制の強化 9-3 魅力化事業の推進体制の充実

3 推進する施策

施策1 生徒の個性に合わせた学ぶ環境の充実

■現状と課題

志津川高校では、平成28年度に1クラス減の3クラスとなりましたが、町内唯一の県立高校として学びの環境を維持しなければなりません。また、近年、家庭学習時間の低下や学ぶ意欲へのばらつきも見られます。南三陸町には民間塾等も少なく、家庭以外の学習環境が乏しい状況にあります。校外の学習環境を整備し、学習意欲のある生徒に対して能動的に学習する場を提供する必要があります。

(1) 学ぶ意欲と確かな学力を育むキャリア教育や少人数個別指導の充実

就職から国公立大学進学まで、生徒の多様な進路を実現するために、きめ細かい学習支援体制の推進や、就職希望者に向けた検定の指導など、より専門性の高いコース内容への充実に取り組みます。また主体的・協働的で能動的な学び(アクティブ・ラーニング)への授業改革を推進します。また、卒業後の進路に向けた具体的なイメージを描くため、町内外の企業や事業所へのインターンシップ事業を推進します。

既存／新規	取り組み内容	内容	実施年	KPI
既存	少人数個別指導の充実	多様な進路の実現に向けてきめ細かい学習指導に取り組む。生徒と教員がマンツーマンで、大学の過去問指導や小論文指導を行う個別添削や、選択科目別の少人数授業を実施する。		
既存	アクティブ・ラーニングの推進	授業手法の研鑽の他、アクティブ・ラーニングを推進するためのICT機材を活用する。		
既存	キャリア教育の推進	卒業後の進路に向けた具体的なイメージを描くキャリア教育に取り組む。企業への実践的なインターンシップや大学訪問、職業ガイダンスを実施する。		
新規	ICT 学習の推進	学習の個別最適化(アダプティブ・ラーニング)を推進するために、ICT機材や映像学習等を用いた学習に取り組む。		

(2) 校外での学びの機会の提供(公営塾)

生徒の学力向上に向けた個別ニーズに対応できるオンライン授業の活用や、予備校・関係機関と連携し、魅力ある公営塾を目指します。また、個別ニーズに対して、より効果的な学習機会を提供するため、登録制ならびにコース制を導入します。

①登録制

公営塾を利用したい生徒は、入塾申込書を提出し、利用開始時に公営塾スタッフと面談を行う。

②コース制

利用者は、個々の希望進路や学習目的に応じて「基礎コース」「発展コース」からコースを選択し、学習に取り組む。尚、コース選択については、年度途中で変更可能とする。

基礎コース	自学自習、個別指導を中心として義務教育段階の学び直し等、基礎学力の定着を目指す。
発展コース	大学受験等を目指して発展的な学習に取り組む。個別指導に加えて、講義形式の授業についても実施の検討を進めていく。

既存／新規	取り組み内容	内容	実施年	KPI
新規	ICT 学習の実施	生徒の個別のニーズに対応するために、タブレット等を活用した ICT 学習を推進する。		
新規	予備校との連携	一般入試を目指す生徒を対象とした特別進学講座を大手予備校等と連携して実施する。		
新規	講義形式の授業の実施	発展コースの生徒を対象に、「英語」「数学」等の講義形式の授業を実施する。		

施策 2 活躍を表現できる多様な場と機会の充実

■現状と課題

南三陸町教育委員会では小中学校において、ふるさと教育に取り組んでいます。また、志津川高校でも「志高まちづくり議会」などの地域と連携した学習に取り組んでいます。これからは小中高の連携した取り組みがより一層必要になります。

志津川高校ではこれまで陸上部が小規模の高校ながら、東北大会、全国大会に出場するなど立派な成績を収めています。志津川高校の魅力や存在を対外的にアピールするうえで、部活動の充実が必要です。

(1) 小中学校と連携した学習の推進

小中学校で学んだふるさと教育を高校ではさらに発展させるために、中学校・高校間での情報交換を積極的に行うとともに、中高合同講演会を実施します。出張ハイスクールなど高校生が中学校に向けて発表するなど、発表する機会を充実します。

既存／新規	取り組み内容	内容	実施年	KPI
既存	地域連携学習プログラムの充実	小中学校で取り組むふるさと学習との連携を図るために、中学校との情報交換を通して、高校のプログラムのさらなる充実をはかる。		
新規	中高合同講演会の実施	町全体で学習への意欲や関心を高めるために、著名講師を招いた講演会を中高合同で実施する。		
既存	出張ハイスクールの実施	高校生が小中学校において高校で学んだ地域連携学習の取り組みを発表するほか、放課後の学習や部活動支援など交流を深める。		

(2) 部活動などの対外活動の支援や外部指導者の強化

音楽部などの文化部を中心に、地域イベントに積極的に参加し、生徒の活躍の機会をつくれます。少人数の部活動についても地域の指導者の活用を行い、充実した活動ができるよう支援します。また、女子硬式野球部を新設し、全国レベルでの活躍を目指します。さらに、専門学校や大学との連携による専門指導や講師の招聘を通じて、高度な技術習得を目指します。また、このような活動を学校 PR に生かすほか、小中高の連携した合同練習や体験入部などを行い、志津川高校に対する関心や意識を高める取り組みも行います。

既存／新規	取り組み内容	内容	実施年	KPI
新規	専門指導者や講師の招聘	専門学校や大学機関との連携によりスポーツトレーナーなどの招聘を行う。		

	取り組み内容	内容	実施年	KPI
既存	地域指導者の活用	野球部、バスケットボール部、バレー部等、各部のレベルアップを目的に、地域の指導者に依頼する。		
新規	女子硬式野球部の活動支援	女子硬式野球部が全国レベルで活躍するための専門指導者ならびに環境整備に取り組む。		
既存	中学校部活動との合同練習や体験活動の実施	中学校の部活動との合同練習や、中学生の体験入部を実施する。		
既存	町内スポーツ施設の活用の推進	町内野球場、体育館等を利用して、各競技の技術向上に取り組む。		

施策3 伝える力・聴く力を養うコミュニケーション機会の提供

■現状と課題

これからの社会を生き抜くためには、コミュニケーション力が必要不可欠です。自己を理解するだけでなく、他者への思いやりを持ち、互いを高め合う風土を学校全体でつくりあげることで、生徒のコミュニケーション能力を高め、心身ともに豊かな人間への成長を促すことが期待されます。

志津川高校では、これまで教科学習や修学旅行、文化祭などにおいてクラス内、学年内、他学年などの関わりを通じて、他者との関わり方を学んできました。しかしながら、南三陸町特有の固定化された人間関係の中で育ってきている生徒が多いため、「あうん」の呼吸でコミュニケーションをとってきた生徒も多い状況です。

(1) コミュニケーション力の向上のための実践型教育の推進

社会で実践できるコミュニケーション力の向上に取り組みます。教科学習での発表や話し合いの機会に加え、地域の社会人との対話や「インターンシップ」など実践的なコミュニケーションをとる機会を充実します。

既存／新規	取り組み内容	内容	実施年	KPI
新規	対外的なプレゼンテーション機会の充実	町内外でのプレゼンテーション、大学生に向けた地域課題研究の発表に取り組む。		
既存	実践的なインターンシップの推進	従来の職場体験的な位置付けのインターンシップを発展的にしたインターンシッププログラムを推進する。地元企業の課題について、高校生の視点で解決策を立案する。		

施策4 目標に向かってチームで協力し合う活動の充実

■現状と課題

1年生が取り組む「地域学(仮称)」、2年生が取り組む「地域探求学(仮称)」は、地域と連携して課題解決の手法を学ぶ志津川高校ならではの取り組みです。調べ学習、プレゼンテーション、フィールドワークなどの授業は、5人前後のチームで取り組むことを基本とするため、コミュニケーション力の育成につながります。

一方で、あらかじめ計画されたプログラムにそって実施するため、生徒有志が集まって企画するような柔軟な活動は生まれにくい問題があります。今後は生徒有志の自主的なボランティアの取り組みなども積極的に応援する必要があります。

(1)生徒主体の教育活動の推進

生徒の主体的な動きが生まれるように支援します。生徒による地域ボランティアや、南三陸町のまちづくり活動に関わる地域系活動を推進します。

既存／新規	取り組み内容	内容	実施年	KPI
新規	地域系活動の推進	農業、観光、まちづくり活動、ボランティア活動へ生徒が参加しやすい仕組みをつくる。生徒会またはクラブ活動として取り組むなど、継続的に実行する。		
新規	少人数クラブ活動の推進	英会話を学ぶインターナショナルクラブ等の活動を推進するほか、少人数でも生徒が主体的に取り組む活動を支援する。		

(2) 地域課題研究などプロジェクト型学習の推進

プロジェクト型学習とは、生徒自ら課題を発見し、目標を明確にして情報を集め、課題解決していく学習方法です。南三陸町の現状を学び、課題について調べるだけでなく、どうすれば解決できるのか、どうすれば地域の魅力を高めることができるか等、具体的なプランを提案し、実現を目指します。

既存／新規	取り組み内容	内容	実施年	KPI
新規	「地域学(仮称)」 〈1年生〉	南三陸町の現状について講義やフィールドワークで学び、南三陸町の魅力を高めるプランの提案などを行う。		

既存／新規	取り組み内容	内容	実施年	KPI
新規	「地域探求学(仮称)」〈2年生〉	生徒が関心ある地域課題をテーマに、調査または実証研究(アクション)を行う。		

施策 5 地域資源の活用や多世代交流の推進

■現状と課題

志津川高校の活動に対して、地域の方にたくさんの支援や協力をいただいています。しかしながら、南三陸町特有の問題でもありますが、幼小中と固定化された人間関係の中で育ってきている生徒が多い状況にあります。また町内で高校生が大学生や若い世代と接することがなく、卒業後のロールモデルと出会う機会があまりありません。

(1) 専門学校、大学と連携した地域資源活用事業の推進

プロジェクト型学習において、地域の有識者、専門学校や大学等の上級学校との連携に取り組みます。

既存／新規	取り組み内容	内容	実施年	KPI
新規	地域指導者や専門講師との連携	専門知識を持つ講師を招き、商品企画や経営、組織について学ぶ機会を増やす。		
新規	専門学校、大学連携の推進	地域課題研究において、大学生との意見交換や研究へのサポートの協力依頼。		

(2) 高校生の活動をサポートする人材ネットワークの構築

地域の有志や各企業の協力のもと、高校生の活動をサポートするネットワーク組織をつくります。高校生に対して、若手社会人の方が自身の経験を話すなど相談にのったり、農業体験活動を受け入れたり、寮生の休日の自然体験などをサポートするなど、地域の方が高校生と関わりやすい仕組みをつくります。

また、志津川高校を卒業した大学生や、高校の活動に賛同してくれる県内・県外大学生とのネットワークをつくり、生徒が大学生と接する機会をつくります。

既存／新規	取り組み内容	内容	実施年	KPI
新規	高校生の活動を支援する地域の応援組織の設立	農業体験、地域ボランティアなど様々な体験を支援してくれる地域の方を募集し、マッチングをはかる。		
新規	卒業した大学生や若手社会人とのネットワークづくり	大学生に地域連携授業の運営ボランティアや、放課後の学習指導などの協力を得る。		

施策 6 新たな価値観を受け入れる多文化共生の推進

■現状と課題

経済のグローバル化が進む昨今、企業も海外との取引や訪日観光客の増加に向けた様々な取り組みが行われています。これからの将来、社会の一員を担う高校生は、グローバル化など社会の変化に対応するために、新たな価値観や異文化を受け入れる力を身につけることが必要です。

現在、志津川高校では台湾との国際交流等に取り組んでいます。しかしながら、南三陸町特有の課題として生徒が町内で日常的に外国語などの異文化に触れる機会は非常に少ない状況にあります。

(1)海外からの留学生の受入れ・交流・派遣の推進

異文化を理解し、地域で活躍できる人材(グローバル人材)の育成につなげることを目的とし、海外の高校との交流に加え、留学生の受入れや、生徒の海外派遣制度の創設を検討します。

既存／新規	取り組み内容	内容	実施年	KPI
新規	海外の高校との交流事業	異文化コミュニケーションを身につけつづけることを目的に、スポーツや文化交流や合同授業。		
新規	グローバル人材の育成講演会の実施	グローバル人材を目指す意義について学ぶために、外部から講師を招き、講演会を実施。		
新規	留学生派遣制度	「集中して語学力の向上を目指したい」「広い視野を身に付けたい」など、意欲的な生徒を対象に、経済的な負担を軽減するため、留学生派遣制度を設置。		

(2)寮の魅力化と受入れ体制の充実

県外から入学した生徒が充実した高校生活が送れるように、南三陸町の文化に触れ、地域の方々との定期的な交流を進めるホストファミリー(地域ふれあい家族)を募集します。また、生活面の自立に加え、育った環境が違う者同志で新たな人間関係をつくり、成長につながる魅力ある寮をつくります。

既存／新規	取り組み内容	内容	実施年	KPI
新規	ホストファミリー(地域ふれあい家族)の充実	寮生に南三陸町の文化を知ってもらうために、地域家庭で民泊体験・交流を行う。		

既存／新規	取り組み内容	内容	実施年	KPI
新規	寮の魅力化	寮でのルール、運営に生徒が携われる機会をつくる他、地域の活動へ主体的に参加するようにはかっていく。		

施策7 自分の夢に向かって取り組む場と機会の提供

■現状と課題

「与えられた課題を解く力」だけでなく、「答えのない問題を解く力」を身に付けるために、地域や企業等の協力を得ながら「地域学(仮称)」などで地域課題をテーマに解決策について考える取り組みを行なっています。このような取り組みを通じて、生徒は「地域の課題に関心を持った」「将来、地域に貢献したい」「自分も何かやってみたい」という地域に対する興味や課題意識が高まっていくと考えられます。

一方で、このような授業は、学年全体やあらかじめ決められたグループで取り組むため、生徒一人ひとりの興味や関心、将来目指す職業とは必ずしも結びついてはいません。「料理人になりたい」「プログラマーになりたい」「南三陸にこんなものがあつたらいいのに」など、生徒一人ひとりが自身の夢や目標に向かって考えをめぐらせることはできますが、「南三陸の食材を使った料理を学びたい」「プログラミングに触れたい」など、具体的な活動を実践するには、部活動や生徒会以外では個別に対応することには限界があります。

(1)生徒が主体的にプロジェクトを実行する「マイプロジェクト“マイプロ”」の推進

「マイプロジェクト“通称マイプロ”」とは、慶應義塾大学(SFC 井上研究室)から開発・実践されてきた教育手法として、高校生や震災復興、まちづくりや企業の人材研究などでも取り入れられ、全国に広がりつつあります。高校生が普段の生活や地域のなかで感じている「こうだったらいいのに」「こんなことをしてみたい」という些細な疑問や違和感、問題意識から、プロジェクトを立ち上げて、実行する高校生の活動です。

マイプロの実施については施策5-2で示した「高校生の活動をサポートする人材ネットワーク」と連携を図り、生徒が主体的に取り組む活動ができるようサポートしていきます。小規模の学校だからこそ、一人ひとりの生徒の夢や「やってみたいこと」の実現に向けて、学校だけでなく、地域全体で応援する体制を作ります。

既存／新規	取り組み内容	内容	実施年	KPI
新規	「マイプロ」勉強会	マイプロについての考え方や全国の事例を学ぶためのワークショップを生徒や地域の方向けに開催する。また、自分の興味関心をプロジェクトとして作り上げる。		
新規	「マイプロ」の実践	高校生が考案したプロジェクトを実践し、活動PRを行う。 例)「高校生が企画・案内する外国人向け南三陸観光プラン」「プログラミング体験教室 in 南三陸」		

施策 8 社会を変える力を生み出す取り組みの推進

■現状と課題

平成28年に公職選挙法が改正され、18歳選挙権がスタートしました。「社会のなかで自立し、他者と連携・協働しながら、社会を生き抜く力や地域の課題解決を社会の構成員の一人として主体的に担うことができる力を養う(文科省)」として「主権者教育」の期待も高まっています。しかしながら「主権者教育」の推進については始まったばかりであり、全国各地の高校でも模擬投票の実施などにとどまっています。

一方、本協議会で実施した生徒アンケートのなかで「意見を言っても変わらないと思っている」という意見がありました。これは志津川高校だけでなく、日本の多くの高校生が感じていることです。学校の規則で生徒を縛るだけでは、政治や社会に関心など持てません。

本来、生徒会は学校運営の一端を担っていますが、多くの学校では、文化祭などの行事の運営等が中心となっています。例えば、生徒会から学校について提案し、小さな動きでも、それが実現につながることで「自分たちの力で学校は今よりもっと楽しくなる」「自分が動けば社会は変わる」という未来を拓く力の育成につながると考えます。

(1)生徒が主体となる学校運営の推進

生徒自らが学校や地域の問題点に気づき、解決に向かうための取り組みを推進します。

既存／新規	取り組み内容	内容	実施年	KPI
新規	生徒による高校魅力化事業の推進	学校全体を巻き込んだ生徒が主体的になって進めるプロジェクトの実践。 例) 志津川高校の制服魅力化プロジェクト		

施策9 持続可能な高校魅力化の推進

■現状と課題

令和5年には連携2中学校の卒業生数は90人台に突入し、令和6年には70人台まで加速度的に減少していきます。このままいくとさらなるクラス減、教員定数減が予測されます。高校に専門的な力量をもつ教員を多く配置し、教科学習の充実、部活動、生徒会等の活動が活発となり、志津川高校の魅力が高まっていくには生徒数の確保は最重要課題です。

これまで、公営塾の設置、志高まちづくり議会、各取り組みの情報発信等に力を入れて取り組んできましたが、中学生や保護者からは、「情報が入ってこない」「進路や学習面の取り組みが分からない」という声が多く、情報発信の手法や中学生や保護者の要望に応えられるよう、発信内容の改善を図る必要があります。

志津川高校魅力化事業において、情報発信や地域連携の取り組みを強化するために、高校、地域、南三陸町、小中学校、関係機関と連携し、効果的な推進体制を構築する必要があります。

(1) 生徒募集と情報発信の強化

志津川高校に興味を持ってもらうための積極的な情報発信に取り組みます。中学校との情報交換を密におこない、オープンハイスクールの参加者増に向けたPR活動や、中学校への情報発信、部活動体験の機会を増やすなど多方面からのアプローチを行います。

県外生徒募集については、東京・大阪での説明会の開催のほか、志津川高校に見学に来てもらうツアーや部活動体験の機会を充実させます。情報発信については、ホームページやSNS、学校通信の全戸配布のほか、プロモーション動画の作成等を行います。また、行事や地域連携の取り組み、部活動だけでなく、進路指導、教科学習の取り組み等中学生や保護者のニーズにあった情報を提供します。

既存／新規	取り組み内容	内容	実施年	KPI
既存	オープンスクールの充実	中学生を対象に、高校の雰囲気や授業、部活動体験、寮見学などを行う。参加者のニーズに応じたプログラムを提供できるように内容を充実する。		
新規	県外説明会や見学ツアーの実施	他校と連携した「地域みらい留学」合同説明会の参加や、南三陸の生活環境や文化を直接感じてもらうために、ツアーを実施する。		
既存	情報発信の充実	中学校での高校説明会、ホームページやSNSの活用、学校生活がイメージできる学校案内・動画の作成、全戸配布による学校通信等で情報発信に取り組む。		

(2) 寮の整備等の受入れ体制の強化

寮の整備や下宿などの受入れの体制について検討していきます。町内生徒数の減少に備えて、**県外生徒の受入可能人数を、1学年あたり25人前後**と設定し、受け入れ体制を整備します。

既存／新規	取り組み内容	内容	実施年	KPI
新規	寮の整備についての検討・推進	寮の拡充を図り、全国からの生徒を受け入れ、地元の生徒と全国から集まった生徒が切磋琢磨できる環境を検討、推進する。		
新規	地域での受入体制の検討	年間通じて寮生が生活できる下宿等を確保し、支援する。		

(3) 魅力化事業の推進体制の充実

第1期志津川高校魅力化構想の実現に向けて、高校、南三陸町、コーディネーター(仮称)等の役割分担を明確にし、施策の改善や実施の検討を定期的に行い、構想の実現に向けた体制を構築します。また、本構想について生徒、保護者、小中学校、関係機関、地域の方々に向けての周知に取り組みます。

既存／新規	取り組み内容	内容	実施年	KPI
新規	効果的な推進体制の構築	高校、南三陸町、コーディネーター(仮称)等の役割分担を明確にし、効果的な推進体制を構築する。		

(4) 財源確保

持続可能な高校魅力化を推進していくためには、安定した財源の確保が重要であると考えます。そのためには、町の財源だけに頼らない、高校独自のファンドレイジングに取り組む必要があります。例えば、「志津川高校応援サポーター制度(仮称)」を構築し、マンスリーサポーターを獲得することで財源を確保することや、同窓生による寄付、クラウドファンディング等、あらゆる策を令和6年度までに検討していきます。

6 成果指標(KPI)と目標値

成果指標(KPI)と目標値を次のように定めます。目標値は第1期構想期間である5年間での達成目標とします。なお、1年ごとに現状値を測り、取り組みを検証します。

◆志津川高校の3クラス維持を目指す

(1) 第1期構想期間における成果指標(KPI)

KPI①	連携2中学からの入学率
KPI②	町外中学からの入学者数(宮城県内)
KPI③	県外からの入学者数

(2) 各指標(KPI)の目標値

	R2(2020)	R3(2021)	R4(2022)	R5(2023)	R6(2024)
連携2中学生卒業生数(中3生徒数)	106人	103人	100人	98人	76人
【KPI①】 連携2中からの入学率(入学者数)	—	65%(67人)	65%(65人)	70%(69人)	72%(55人)
【KPI②】 町外中学からの入学者数	—	15人	15人	15人	20人
【KPI③】 県外からの入学者数	—	—	10人	15人	25人
志津川高校入学者数	—	82人	90人	99人	100人
定員充足率	—	68.3%	75.0%	82.5%	83.3%

(参考) 志津川高校入学者推計値

	R2(2020)	R3(2021)	R4(2022)	R5(2023)	R6(2024)
連携2中学生卒業生数(中3生徒数)	106人	103人	100人	98人	76人
連携中からの進学率(直近5年間の平均)	57.50%				
町内から志津川高校への進学者数	61人	59人	58人	56人	44人
他地区から志津川高校への進学者数(直近5年間の平均)	9人				
志津川高校入学者数推計	70人	68人	67人	65人	53人
定員充足率	58.3%	56.7%	55.8%	54.2%	44.2%

(3) 魅力化アンケートの実施

- ① 第1期構想の効果を図るために、年度ごとにアンケートを実施する。
- ② 生徒一人ひとりの3年間の数値の変化を比較。
- ③ 事業実施初年度(R2)と第1期構想最終年度(R6)の比較。